



山本有三文庫 6

中央公論社

不惜身命

他

昭和二十九年七月十日 発行

定価 一五〇円



不惜身命 他

著者 山本 有三

発行者 栗本 和夫

印刷者 長久保 慶一

発行所 中央公論社

東京都千代田区丸の内二ノ二
丸の内ビルディング五九二区
電話和田倉一―二二番
振替口座東京三四番

乱丁・落丁本は本社又はお買求めの書店
でお取替えいたします

印刷・大日本印刷株式会社

山本有三文庫 6

不惜身命
他

中央公論社

口 装
絵 幀
山 原
村
耕
花 弘



目次

兄 弟	七
チヨコレート	一五
子 や く	四一
こ ぶ	六七
ふしやくしんみよう	一七
無事の人	一八九
解説	二九三

兄

弟

——にいさん、これ、そうだろう。

——どれ。

兄はそばにいる弟のほうをふり向いた。そして、弟のさし出したキノコを見た。しかし、すぐ言
った。

——それはちがうよ。こういうんでなくちゃ。

彼は、自分で今とったばかりのハツタケを、弟に示した。

——これ、だめ！

弟は残り惜しそうに、とったキノコをながめていた。

——あ、そういう色のものはだめなんだよ、ヘビダケってね、毒のキノコなんだよ。

彼はまだ十一の少年だけれど、弟にたいする時は、さすがに兄らしい落ちつきと、いたわりとが
あった。

弟がしよげているので、彼は気の毒になった。なんとかして、弟にもとらしてやりたいと思った。
それで、ボール・パンのような色をしたハツタケのあたまを見つけると、さっそく弟に教えてやっ
た。

——真ちゃん、そこにあるよ。

弟はそれを聞くと、元氣づいてそこらを見まわした。しかし、しら茶けた落ち葉のほかには、なんにも目にはいるものはなかった。兄はかさねて言った。

——そら、そこにさ。真ちゃんの足もとのところに。

——どこに。

——これさ。

と、兄は弟のそばに寄って行って指さした。

——葉っぱでわかんないんだもの。これ？

弟は落ち葉を払いのけて言った。

——あ。

——毒ダケじゃない？

——うゝん、これがほんとのハツタケだよ。

——ぼく、とつてもいい。

——いいとも。

弟はかゞんでハツタケを抜いた。しかし、不気味な虫でもつかんだ時のように、あわててキノコを離してしまった。

——なんだって捨てちまうの、真ちゃん。

兄はなじるように言った。

——だって、こわいんだもの。

——何がさ？

弟はうつむいたまゝ黙っていた。

兄のくちびるに、微笑が浮かんた。

——あゝ、キノコの色が変わったんで、驚いたんだね。なあに、そりゃ、なんでもないんだよ。ハツタケは、さわると、すぐ色が変わるんだよ。

——じゃ、大丈夫？

——大丈夫さ。

弟は、やっと安心したというふうであつた。

——もったいない。こん中へ入れときよ。

兄はザルのかわりに、おいてある、自分の帽子をさした。弟は拾つて、その中へ入れた。それから、ついでに、兄がとつた、帽子の中のキノコの数をかぞえてみた。

そのあいだに、兄は落ち葉をかさつかせながら、あっちこっちハツタケをあさつていた。兄が目きよろ／＼させている様子は、ちょうど、朝、おばあさんが背なかを丸くして、ふとんの上でノミを追いかける格好とよく似ていた。弟はそれを見ると、わけもなく、うれしい氣もちになつてきた。そして、自分もまた、すぐに背なかと目だまをまあるくして、タケ狩りをやりだした。もちろん、弟は兄の四半分もとれなかつたけれど、マツ林の中を跳ねまわることは、彼には愉快でたまらなかつた。

突然ドシーンという音がした。兄はふいと目をあげると、一間ばかりさきの、少し傾斜になっている地面の上を、弟はころ／＼とところがっていた。おそらく、木の根か何かにつまずいたのだろう。はすみをくらって、ころがり出したものらしい。それを見ると、兄は思わずふきだしてしまった。

弟が目の前で倒れたのだから、すぐにも駆けて行って、起こしてやるのが、当然なのだが、その瞬間には、「弟」とか、「起こす」とかいう考えは、まるでなかった。それどころか、手を打って、はやし立てたいような気もちでいっぱいだった。しかし、次ぎの瞬間には、もう弟のそばにいた。そして、木の根かたでとまった、弟のからだを引き起こした。

そのときの彼は、いたわり深い兄であった。彼は心配にふるえながら、弟を介抱した。ところが、弟は起きあがると、兄の顔を見るなり、にやりと笑った。すると、兄の顔もまた、ひとりだけにほえんでしまった。泣きだすと思つた弟が笑つたものだから、兄は急に気が軽くなった。

弟は起きあがると、すぐに笑えたくらいだから、どこもけがはしていなかった。しかし、彼の笑いは妙ちきりんな笑いだった。もちろん、しくじりをやつたあとの、てれかくし笑いに相違ないのだが、それにしても、どこかへんなところがあつた。よく見ると、それは、弟の右のほつぺたに、したゝか、どろがついていたからだつた。おそらく、倒れたときに、くつついたものだろう。兄はそれを知ると、すぐに指でどろを落としてやつた。けれども、よく落ちないので、筒そでの中に手を引っこめて、それでほつぺたをこすってやつた。ところが、それでも、すっかり奇麗にならないものだから、今度は彼は、筒そでのさきに、つばをつけて、丁寧にふいてやつた。そのあいだ、弟はおとなしくして、兄のやつてくれるまゝになっていた。

それから、ふたりはまたタケ狩りをやりだした。

しばらくしてから、兄はハツタケでいっぱいになっている帽子を取りあげて、得意そうに言った。

——真ちゃん、こんなにとったよ。

その時、突然うしろで大きな声がした。

——やい、それを持ってくことはならねえぞ。

ふたりはびっくりして、その声のほうを見た。うしろに、山ばんのじいさんが立っていた。彼は待ち構えていたと言わぬばかりに、ふり向いた少年の手から、キノコのはいつている帽子を取りあげた。そして、いきなり兄の横つつらを一つ、なぐりつけた。

——ふてえ野郎だ。

しかし、年うえの少年は泣かなかった。たゞ、顔をまっかにして、首をうなだただけだった。ところが、弟のほうは、自分がなぐられたのではないけれど、急にわあっと泣きだしてしまった。

山ばんは、少年らが無断でハツタケ山を荒らしたことを、なお、くどくどとおこった。そして、

——またはいってくるぞ、承知しねえぞ。

そう言つて、ふたりをマツ林のそとに追い立てた。そこまできると、じいさんは帽子の中のハツタケを、自分のザルの中にあけて、からになった入れ物を、少年にたゞきつけたなり、行つてしまった。

弟はなおしく／＼泣いていたが、こゝんで、芝の上に落ちてゐる兄の帽子を拾った。そして、それを兄に手わたそうとした。すると、兄は、帽子を受け取らずに、いきなり、弟の横つつらをなぐ

りつけた。じいさんになぐられたので、そのとばっちりが、弟に飛んで行ったのだろうか。いや、いや。こうした場あい、年したの者なんぞから親切にされると、何か知らないが、兄には一層たまらなかったのである。

弟は不意になぐられたので、前よりもはげしく泣きだした。と、その声につれて、今まで泣かずにいた兄も、弟をなぐっておきながら、またわあっと泣きだしてしまった。

それから、ふたりは長いこと泣いていた。はじめは、声を立てて泣いていたけれど、しまいには、たゞ機械的に涙が出るだけだった。そして、あったかい水たまが、ひっきりなしに流れているうちに、ふたりのほつべたは、何か柔らかいものになでられているような、なんとも言えない快感を覚えてきた。

弟はちいさい声で言った。

——にいさん、勘弁してね。

——うん。

兄はたゞ「うん」と言っただけだった。声はうるんでいるが、明かるい響きを持っていた。

やがて、兄は、どろだらけになっている帽子を拾って、ひざの上で五、六度たたくいた。彼はそれをかぶらないで、かた手に持ったまゝ、べつの手で弟の手をとった。そして、うちのほうへ歩きだした。しかし、ふたりはみち／＼思い出したように、なお、泣きじゃくっていた。

執筆 大正十一年四月

発表 大正十一年十月 「新小説」